

令和7年産

大崎稲作情報 第5号

令和7年7月11日発行

宮城県米づくり推進大崎地方本部

大崎農業改良普及センター

TEL:0229-91-0726 FAX:0229-23-0910

<https://www.pref.miyagi.jp/site/osnokai/>

今後の管理のポイント

- ✓ 白未熟粒の発生を防ぐため、稲の生育量に応じて追肥を行いましょう。
- ✓ 幼穂形成期に達したほ場では、間断かん水を行いましょう。
- ✓ いもち病や斑点米カメムシ類防除に努めましょう。

1 気象経過（前5か年間平均値との比較）

6月第4半旬以降、高温傾向が続いています。梅雨入り（6月14日）後も6月第4半旬以降は降雨が少なく、日照時間が多くなりました。

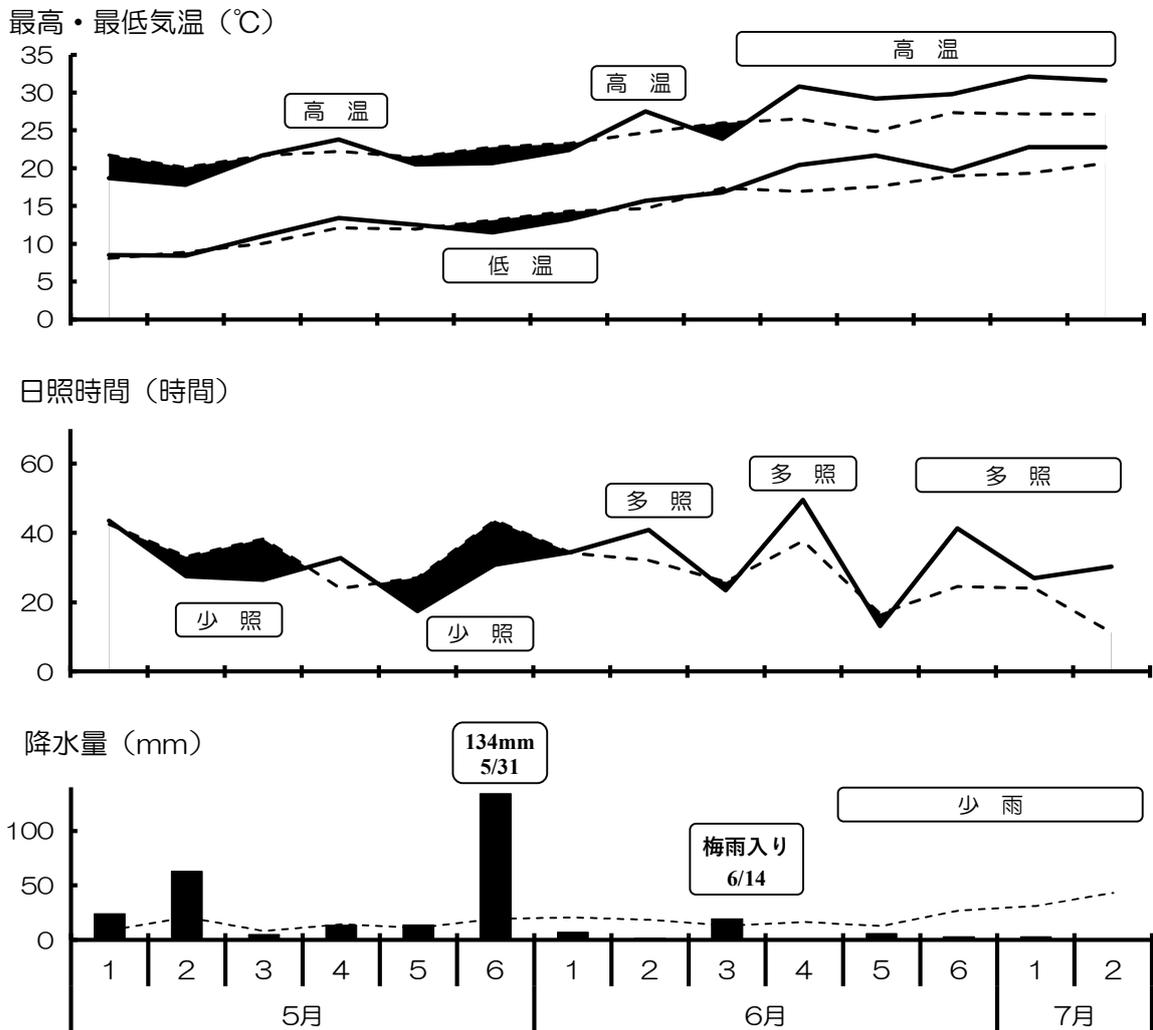


図1 5～7月上旬の気象（古川アメダス） ※前5か年平均値との比較

2 生育概況（7月10日現在）

6月第4半旬以降の高温多照が続いたため、5月上旬植の移植栽培では、生育量が平年を大きく上回っており、幼穂の伸長も早く、平年よりも1～4日早く幼穂形成始期に達しています。5月下旬植小野田の移植ひとめぼれでは、草丈は平年並ですが茎数は未だ平年を下回っています。

乾田直播栽培でも、既に幼穂形成始期に達しているほ場もあり、4月上旬播種の大豆後「ササニシキ」では、移植栽培よりも生育量が大きくなっています。4月下旬播種でも目標茎数（穂数

目安420本～460本/m²、7/15 茎数の目安 590本～640本/m²）に達しています。

飼料用米「ふくひびき」でも、目標収量700kg/10aとした乾田直播での生育の目安（穂数420本/m²、7月上旬の茎数550本/m²・葉色35以上；福島県農業総合センター 浜地域研究所）に近い生育量を確保しています。

表1 生育調査結果

栽培様式	品種名	地区名	前作	田植日 播種日	7月10日					幼穂 形成始期	正規化 植生指数 NDVI	
					茎数 本/m ²	草丈 cm	葉色 GM	生育量 茎数×草丈×葉色	幼穂長 mm			7/7～9
					(平年比)	(平年比)	(平年差)	(平年比)	(平年差)			
移植	ひとめぼれ	三本木	水稻	5/5 (+1)	656 (121%)	80.9 (116%)	41.9 (-0.1)	22.2 (139%)	13.7 (+7.7)	7/3 (-1)	0.69 -	
		小野田	水稻	5/21 (+4)	437 (83%)	64.1 (100%)	39.1 (-3.9)	10.9 (78%)	0.7 (-0.3)	- -	- -	
	ササニシキ	古川	水稻	5/6 (-2)	558 (106%)	73.5 (113%)	40.0 (-3.0)	16.4 (109%)	4.5 (+3.5)	7/5 (-3)	0.73 -	
	平均			5/10 (+1)	550 (103%)	72.8 (110%)	40.3 (-2.3)	16.5 (109%)	6.3 (+3.6)	- -	0.71 -	
乾田 直播	ササニシキ	古川	大豆	4/28	657	46.7	34.6	10.6	0	-	0.52	
		三本木	大豆	4/10	794	65.7	43.5	22.7	1.9	7/9	0.64	
			水稻	4/10	524	60.4	37.7	11.9	0.5	-	0.61	
	ふくひびき	色麻	大豆	4/22	510	75.8	34.7	13.4	1.0	7/10	0.60	

※田植日の+は遅いこと、-は早いことを示す。乾田直播はいずれもグレーンドリル鎮圧方式による。

※平年比・差は前5か年（令和2～6年）の平均値との比較。

※生育量は茎数/m²×草丈cm×GM値÷10万で求める指標で追肥判断等の目安となります。

※正規化植生指数は、ほ場管理者が契約する BASF 社ザルピオ®・フィールドマネージャーによる。

3 出穂予想

今後の平均気温が前11年平均値並に経過した場合、中生品種の出穂期は7月29日頃となる見込みです。今後の天候により、生育ステージが予測値から変動することがありますので、ほ場の幼穂長を確認し、随時生育ステージを把握することに努めましょう。

表2 生育ステージの予測

田植時期	田植始期	田植盛期	田植終期	7/10現在,7/11以降はアメダス前11年平均値で予測
	4月30日	5月10日	5月23日	
幼穂形成始期	7月1日	7月7日	7月17日	
減数分裂期	7月8日	7月15日	7月26日	
出穂期	始期	最盛期	終期	
	7月22日	7月29日	8月7日	
平年（前5カ年）との差	6日早い	2日早い	2日遅い	

※対象品種は中生品種の「ひとめぼれ」、「ササニシキ」

4 今後の管理

※1か月予報では引き続き高温となる見込みです。高温対策技術を励行しましょう。

1) 追肥 白未熟粒の発生を防ぐため、生育量を基に施用を判断

- ✓ 高温下では、籾数過多や登熟期の窒素栄養不足により白未熟粒の発生が助長されるので、ほ場ごとの地力に応じた適正な施肥管理に努め、必要に応じて適期に追肥を行いましょう。
- ✓ 生育量が不足している（葉色が薄い、茎数不足等）場合には、追肥が必要ですが、過剰な追肥は倒伏や病害虫の誘発へとつながります。追肥の実施は、生育量（葉色の濃さ、倒伏診断指標等）を基に判断しましょう。
- ✓ 追肥の効果や各品種の目安、倒伏診断指標については稲作情報第4号を参照してください。

2) 水管理 **幼穂の発育には水の吸収が不可欠、高温対策と節水を兼ねた飽水管理を**

- ✓ 幼穂形成期に達したほ場は間断かん水を行いましょ。特に減数分裂期～出穂期前後は水の吸収量が最も多い時期となります。この時期に水分が不足した場合、幼穂の発育や開花・受精が妨げられます。間断灌水により土中に酸素が供給されることで根の活性も維持されます。
- ✓ 低温時（日平均気温 20℃以下が長期間続く、または最低気温 17℃以下）の際は障害不稔が発生する恐れがありますので、深水管理としましょ。

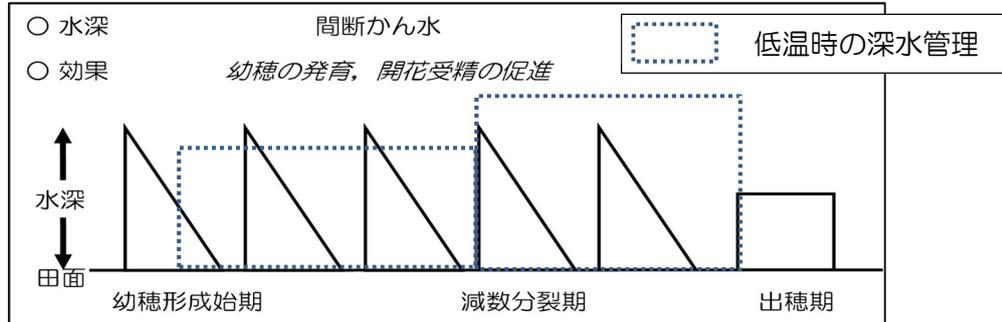


図2 今後の水管理

- ✓ 出穂期以降の夜温が高いと、湛水状態では夜間の水温が下がらないため、稲体の温度も下がらず、光合成で作られた養分を呼吸で消費してしまうことで、白未熟粒の発生を助長します。高温時は、根の活力維持、地温の上昇抑制のため、走水等により土壌を常に湿潤状態に保つ飽水管理を実施しましょ。飽水管理は、限られた用水でも実施可能です。

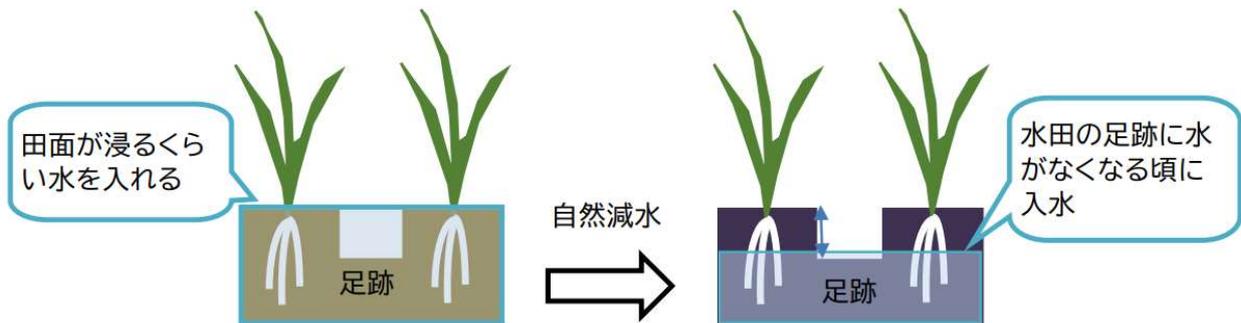


図3 飽水管理のイメージ

3) 病虫害防除 **出穂予想に基づいて適期に実施**

葉いもち：7月中旬以降は、育苗箱施用剤の効果が低下し始めるとともに、追肥等で葉色が濃いほ場は葉いもちが感染しやすい環境となります。ほ場をよく見回り、発病が見られた際は速やかに茎葉散布剤で防除しましょ。特に、上位葉での発病は穂いもちの重要な伝染源になるので注意しましょ。6月下旬に葉いもちの感染好適条件が出現しているため、今後の発生に注意しましょ。

穂いもち：水面施用剤による予防防除を実施する場合は、生育状況をよく観察し、出穂期の予測に基づき使用時期（出穂 20～10 日前頃）を逸さないように注意しましょ。

紋枯病：高温下では、紋枯病が発生・拡大しやすくなります。宮城県病虫害防除所による6月下旬の巡回調査の結果、発病株率は平年よりやや多かったとのこと。前年に紋枯病が多発したほ場では穂揃期に茎葉散布剤を散布するなど、防除を徹底しましょ。

稲こうじ病：窒素過多で発生が助長されるので追肥の際は注意しましょ。

斑点米カメムシ類：高温下では、斑点米カメムシ類の活動が活発化し、斑点米が増加する傾向があります。宮城県病虫害防除所の巡回調査では、水田のすくい取り虫数は平年より多くなっています。薬剤防除は穂揃期とその7～10 日後の2回防除を基本とし、2回目の薬剤散布以降も斑点米カメムシ類の発生がみられる場合は、追加防除を実施しましょ。

多発の原因となるイヌホタルイやノビエが残草したほ場では、1 回目の殺虫剤散布を出穂始期～穂ぞろい期に早めることで、斑点米カメムシ類の密度を低下させることができます。

